

# 江戸川乱歩『孤島の鬼』論—同性愛に関する言説の揺れ<sup>①</sup>

ジェラルド・プルー

## 1 イントロダクション

江戸川乱歩（二八九四～一九六五）は、一九六一年完結の『探偵小説四十年』の中で戦前創設された精神分析研究会にふれて、次のように書いている。

当時人嫌いで、交友といつては、鳥羽の岩田準一君が殆んど唯一の相棒で、一緒に旅行をしたり、東京市内、殊に浅草公園をぶらついたりしていた。探偵小説仲間とも殆んど往来していなかった。そんな人嫌いのさなかに、精神分析の会だけは進んで毎月出席したのには、わけがある。精神分析には同性愛が非常に大きな題目として取扱われていたからである。会員の中にも同性愛研究に興味を持っていて人が二三ならずいたからである。ちよつと断つておくが、岩田君とは同性愛文献あさりの点で気が合っていたので、彼は私より年少であつたけれども、二人の間に同性愛関係があつたわけではない。よく旅を一緒に泊つたりしたが、私は彼と手が触つても嫌悪感を催すほどであつた<sup>②</sup>。

江戸川乱歩の、同性愛に関する全ての要素が、ある意味で以上の引用の中に含まれているのである。乱歩と同性愛について論じる時、乱歩が興味を抱いた精神分析のこと、乱歩と画家・男色文献研究家の岩田準一（二九〇〇～一九四五）との関係のこと、乱歩が述べている同性愛文献あさ

りのこと、浅草公園体験のこと等、それらのテーマが必ず出てくる。また、岩田準一と一緒に旅行の間に乱歩がインスピレーションを受けた小説は、一九二九～三〇年連載の『孤島の鬼』にはかならず、乱歩と同性愛の関係を検討する場合、『孤島の鬼』の特別な意味も見逃すべきではない。

『孤島の鬼』についての乱歩の意見はそれほど高くなかつたとよく知られている。前向きで書く自信があつたような乱歩ではあつたが、次のように述べている。

私の幾つかの長篇小説の内では、『パノラマ島』とこの『孤島の鬼』の二つが、前以てやや筋が出来ていたのであるが、いざ書いて見ると、臆げに考えていたのが、間違いであつたりして、やっぱり毎月の締切ごとに困らなければならなかつた。そして、結局あんなものしかできなかつた<sup>③</sup>。

「毎月の締切に困」つたのは、乱歩の作家生活の欠かせないモチーフであり、『孤島の鬼』はその点で特別な作品ではなかつた。「臆げに考えていたのが、間違いであつたりして」とも書いた乱歩は何を考えていたかという点、次の引用から分かる。

この小説には同性愛がある。同性愛なんて、ギリシャ、ローマの昔か元禄時代ならいざ知らず、現代では、関心を持つ人は殆どないのだから、娯楽雑誌にそんなことを書くのは見当違いだと思つたけ

れど、その時分岩田君と東西の同性愛の史実について語り合うことが多かったものだから、ついそれが影響したのかもしれない。だが探偵小説のこと故、この異様な恋愛を思う様に書く機会がなかった。それが筋を運ぶ上の邪魔物にさえなった。<sup>④</sup>

乱歩は岩田準一の影響で同性愛のテーマが『孤島の鬼』に取り上げられてしまい、失敗（「あんなもの」となったと書いているが、同時にすでに同性愛に関する書籍蒐集を始めていたから、岩田準一の単なる「悪い影響」とは言えないと考えられる。『孤島の鬼』を同性愛の観点から検討すると、どのような作品か、どのような言説が含まれているかというところ、かなり曖昧であったり、矛盾したりしているように見える。例えば、次のような文章がある。

実を云うと、自分の恋の打明け話を、書物にして衆人の目にさらすというのは、小説家でない私には、妙に恥しく、苦痛でさえあるのだが、どう考えて見ても、それを書かないでは、物語の筋道を失うので、初代との関係ばかりではなく、その外の同じ様な事実をも、甚しいのは、一人物との間に醸された同性愛的な事件までをも、恥を忍んで、私は暴露しなければならぬと思ふ。<sup>⑤</sup>

以上の言葉は、箕浦金之助というナレーターが『孤島の鬼』の書き出しで述べたものであるが、もう一人の主人公、諸戸道雄に関する次の言葉も箕浦のものであり、前の引用の少し後に出てくる。

彼は私の知る限りに於いて、肉体的にも精神的にも、最も高貴な感じの美青年であり、私の方では決して彼には妙な愛着を感じている訳ではないけれど、彼の気難しい選択に適ったかと思うと、少くとも私は私の外形について聊かの自信を持ち得る様に感じることもあったのである。<sup>⑥</sup>

ナレーターの、同性愛に関する言説が揺れているのは、『孤島の鬼』の

至る所に見られる現象である。非常にネガティブな発言から同性愛に対する理解を示す発言まで、様々なスタンスが、ナレーターをはじめ、登場人物によってなされているのである。

この驚くべき揺れの検討と分析が、本論の目的である。この前に引用した乱歩の意見によれば、『孤島の鬼』は同性愛を取り入れたからこそ失敗になってしまった作品だということであるが、そのいわゆる失敗の一つの原因がまさにその揺れにあったと乱歩が感じていたのではないかと思う。『孤島の鬼』を詳しく読めば読むほど、揺れの規則があるとも言えないのではないかと思ひ、本論を、その規則の探索としてほしい。

## 2 江戸川乱歩と同性愛

乱歩の表現を借りれば、乱歩の諸作品に「同性愛がある」と確実に言える。乱歩自身、『同性愛文学史』というエッセイで、同性愛に興味を持ち出したのが一九二七〜二九年ごろからだと言っている。<sup>⑦</sup>この期間中の乱歩の作品風は、本格探偵小説の短編小説から変格探偵小説の長篇小説への過渡期にあたっており、『新青年』の舞台を後にして、『朝日』、『講談倶楽部』、『文芸倶楽部』、『キング』といった大衆雑誌に連載を始める時期でもある。『孤島の鬼』はちょうどその時期に書かれ、大衆雑誌『朝日』に連載された。

しかし、乱歩は『孤島の鬼』をもって同性愛について語り始めたわけではない。『孤島の鬼』は同性愛が結晶した作品ではあるが、それ以前同性愛、あるいは男同士のあらゆる関係を取り上げている作品は、かなり早く多く見られるのである。以下、イヴ・セジウィック (Eve Sedgwick) の『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』<sup>⑧</sup>のホモソーシャルとホモセクシュアルの相違、そしてホモエロティシズムの三つの概念

を使いながら『孤島の鬼』出版を前後しての乱歩の作品の中に出ている男同士の関係を追求めてみたいと思う。

#### ア 乱歩の作品の中の同性愛の多様性

一九二三年のデビュー作『二銭銅貨』から一九三五年頃まで、男同士の関係の描写が圧倒的に多い形式は、男同士のホモソーシャル的な関係の形式である。女性はいないわけではないが、殺されたり、解体されたりという運命に面している女性、あるいは、毒婦の伝統を受け継いだお勢（一九二六年作「お勢登場」）、小山田静子（一九二八年作『陰獣』）、黒蜥蜴（一九三四年作『黒蜥蜴』）などのような女性像はごく少なく、特別な地位を占めるはずだった明智小五郎の妻・玉村文代も、いつともなく、小林少年にその地位を奪われてしまった。

逆に、男同士の関係、あえていえば男のカップルが多く登場している。『二銭銅貨』の木村武とナレーター、一九二四年作『二廃人』の齊藤と井原、『陰獣』の大江春泥と寒川などが競争・対立したりしているといった図式が特徴的と言える。名探偵・明智小五郎もその図式に入っており、明智と警官の浪越、明智と助手の小林少年、明智と敵の怪人二十面相など、カップルの可能性が多角的に展開されている。明智と女性の黒蜥蜴も、結局は男同士の図式を覆すわけではない。男性に変装したりする黒蜥蜴のジェンダーのアイデンティティが非常に曖昧だからである。とはいつても、このホモソーシャル的な関係がいつさい性的関係にはつながらない。

ホモエロティシズム、つまりエロチックな可能性が暗示されているモチーフは、一九二五年作『人間椅子』以外、乱歩の作品にほとんど見られないばかりでなく、『人間椅子』でさえ、大きなテーマにはならず、物語の一要素でしかない。実は、男性の身体を全面的に押し出す描写は乱

歩の作品において非常に稀である。性関係を意味しないホモソーシャルの関係と性関係を暗示しているホモセクシュアリティとの間に位置付けられるホモエロティシズムは、性行為への可能性という意味で、乱歩の作家活動から見て、タブーのようなカテゴリーだったように思う。

したがって、乱歩のフィクションのどこで同性愛が明確に描写されているかという点と、『孤島の鬼』以外、一九二五年作『屋根裏の散歩者』、一九二六年作『モノグラム』、一九二六・二七年作『一寸法師』、一九三〇年作『猟奇の果』である。この四作では、同性愛が特別な視点から導入されている。二人の登場人物のいわゆる恋愛関係からの視点をとつて『孤島の鬼』に対して、『屋根裏の散歩者』などでは、浅草公園を中心に、同性愛者のハッテン場とその「使用者」の描写が散々している。フィクションではありながら、グロテスクなイメージを多く使っているエロ・グロ・ナンセンスのテクニクと、今和次郎（一八八八～一九七三）の考現学の方法を使いながら、社会学的調査の結果を読者に提出していると言える。

どのような描写がなされているかを、以下の三つの例でもわかって。当時ハッテン場として有名な浅草公園のシーンである。

その男は私の隣へ腰かけると、袂から敷島の袋を出して、煙草を吸い始めましたのですが、そうしている内に、段々、変な予感みたいなものが、私を襲って来るのです。妙だなどと思って、気をつけて見ると、男が煙草をふかしながら、横の方から、ジロジロと私を眺めている、その眺め方が決して気まぐれでなく、何とやら意味ありげなんです⑨。

その間を奇妙な散歩者が歩くのだった。寢床を探す浮浪人、刑事、サーベルをガチャガチャいわせて三十分ごとに巡回する制服巡査、

文三と同様な猟奇者、などがその主なものであったが、外にそれらのいずれにも属しない一種異様な人種があった。彼等は一寸その辺のベンチに腰をおろしたかと思うと、じきに立上って同じ道を幾度となく往復した。そして木立の間の暗い細道などで外の散歩者に出逢うと、意味ありげに相手の顔をのぞき込んで見たり、自分でもそれを持っている癖に、相手のマッチを借りて見たりした。彼等は極めて綺麗にひげをそって、つるつるした顔をしていた。<sup>⑩</sup>

青年はじっと、愛之助を見つめていた。紺がかつた春服を着て、同じ色の学帽の様な一種の烏打帽子の、深いひさしの下から、闇の中に柔軟な線の、ほの白い顔が浮上っていた。美しい若者だ。愛之助は決してペダラストではないので、うれしくもなかったが、併し、別に不快を覚える程でもなかった。(略)

突然耳元で、囁く様に、古風に呼びかける声があった。振向くとさっきの美しい青年が、立って来て、いつの間にか彼の側へ寄っていた。愛之助はハッと当惑した。浅草ウルニングの誘いには、一度こりていたからだ。<sup>⑪</sup>

乱歩が猟奇者の目を通じて、ハッテン場とそこにいる男達の付き合いの規則をかなり詳しく説明している方法は、フィクションの作品の中で珍しいのではないかと思うし、考現学者のデパート調査、学生制服調査などのテクニクによく似ているのである。また、同性愛者のハッテン場に対する興味が当時かなり高かったのは、一九三一年来日したドイツ人のマグヌス・ヒルシュフェルト (Magnus Hirschfeld、一九六八～一九三五) も浅草公園へ「アサクサ・ストリートボイズ」に会いに赴いた出来事でも分かる。

『猟奇の果』の執筆は『孤島の鬼』と重なっているが、ドイツのカー

ル・ハインリヒ・ウルリックス (Karl Heinrich Ulrichs、一八二五～一八九五) が一八六〇年代に作り出した「ウルニング」(Uring)、また、古代ギリシャと関係のある「ペダラスト」(英語 Pederast、仏語 Pederaste、独語 Pederast) という専門用語が表れているのも、一九三〇年が乱歩にとってフィクションにおける同性愛に対する興味のピークの年であったということを示している。

乱歩は、『孤島の鬼』のいわゆる失敗の後、同性愛に関する考察を、エッセイの形で続けるようになった。また、以上のような専門用語は、乱歩の文献漁りの一つの結果であると言えるが、フィクションと専門用語の使用、フィクションと同性愛考察について乱歩は違和感を感じた結果、同性愛論をエッセイに移したと考えられる。

#### イ 同性愛に関する乱歩のエッセイ

一九三〇年代に入ると、乱歩は同性愛を二つの観点から研究し始める。一つは、西洋、中国、日本の、同性愛についての書籍蒐集、もう一つは、エッセイの執筆である。

二つの自伝的な作品(一九二六年作『乱歩打明け話』と一九五二年作『同性愛文学史』)を除いて、同性愛を取り上げているエッセイは、六つ数えられる。『J・A・シモンズのひそかなる情熱』(一九三三年)、『槐多「二少年図」』(一九三四年)、『ホイットマンの話』(一九三五年)、『もくづ塚』(一九三六年)、『シモンズ、カーペンター、ジード』(一九三六年)、『書斎の旅』(一九四〇年)である。

同性愛関連の書籍蒐集はここでは触れないが、渡辺憲二によると、旧江戸川乱歩邸の後ろにある書庫と書斎の土蔵の中に同性愛文献のインデックスが保存されており、それらの書籍についての読書ノートが五冊もあるそうである。<sup>⑫</sup> 書籍蒐集は日本の男色を中心に行われたのに対して

(岩田準一の方は西洋の同性愛のそれを行ったらしい)、大体のエッセイは西洋を中心としており、特に「ゲイ解放運動」の先駆者達と、乱歩が述べている「グレコ・マニア」<sup>⑬</sup>の古代ギリシャ趣味とに重みを置いている。

『J・A・シモンズのひそかな情熱』という、最初に書かれ、中絶とはいえ一番長いエッセイを中心に考察を進めたいと思う。

一九三三年五月から十一月までこのエッセイが連載された機関誌『精神分析』だということ自体は、まったくの偶然ではない。乱歩はちょうど一九三三年一月から精神分析研究会の毎月の例会に加わり、四月頃イギリス人のジョン・アディントン・サイモンズ(John Addington Symonds、一八四〇～一八九三)に興味を持ち始めたと言っている<sup>⑭</sup>。

乱歩の精神分析への興味は、一九三三年に急に始まったわけではない。デビューの段階から、精神、心理のテーマが大きな役割を彼の作品の中で果たしていたのである。一九二三年作『一枚の切符』、一九二五年作の『D坂の殺人事件』と『心理試験』、といったような短編では、犯罪そのものより犯罪者の心理的動機と心理的反応がテキストの大きなテーマとなっている。明智小五郎は、『D坂の殺人事件』で、事件を解こうとしている友人が物質的な証拠に影響され過ぎたと主張して、次のように続けている。

物質な証拠なんてものは、解釈の仕方でもなるのですよ。一番いい探偵法は、心理的に人の心の奥底を見抜くことです<sup>⑮</sup>。

乱歩の精神分析への興味は、本人が述べているように、まず同性愛が精神分析の一つのテーマであることに由来している。また、明智小五郎が主張している「心理的に人の心の奥底を見抜くこと」が「一番いい探偵法」であるように、乱歩は、サイモンズの心の奥底を見抜こうとしている時に、探偵的な仕方でサイモンズの作品の中で同性愛の証拠を浮き彫りにしようとしたのである。探偵になった乱歩は、サイモンズがなぜ

ルネサンスと古代ギリシャにそれほど魅了されていたかを、文学と精神分析を絡みながら探っていくとした。サイモンズの一番有名な作品は、七巻にも及ぶ『イタリアのルネサンス』(Renaissance in Italy、一八七五～八六年)という研究である。ヴィクトリア朝時代では同性愛を公的に表明するのはもつてのほかであったが、サイモンズは詩歌の評論や古代ギリシャ時代の男性愛(Male Love)に言及した初めての人と見られている。また、日記にも同性愛者として自分を認めて見つけるページもあるので、画期的なものである。

乱歩は精神分析の概念から見て、サイモンズがホメーロスの『イーリアス』やプラトンの『饗宴』と『パイドロス』を愛読していた理由を究明し、なお、サイモンズの夢の意味を抑制された同性愛の表現にほかならないと主張している。以下の引用の中で見るように、乱歩は当時の精神分析の用語を使っている、というよりも、濫用しているのも興味深い。

シモンズ自伝に現われた不思議な母への冷淡、父への愛着が、図らずも私にこのフェレンツイ<sup>⑯</sup>の一節を思出させた。彼はフェレンツイの所謂倒錯せるエディポス・コンプレックスに支配されていたのではなかったか。つまり同性恋情は、彼の場合、自己を女性の立場に置くものではなかったか。(略)彼の性格は恐らくフェレンツイの所謂Subject-homo-erotismもつと普通の言葉を用いるならば、カール・ハインリヒ・ウルリックスの命名以来一般的に用いられているUringに属するものである。即ちウルリックスの所謂男体女心(anima muliebris in corpore virili inclusa)の一つの型と考えて差支えないのであろう。それ故にこそ、シモンズの場合は、普通の如くエラステースとしてではなく、パイデイカの立場から、長年のギリシャの恋愛を感じ得たのである<sup>⑰</sup>。

乱歩は、以上の結論を踏まえて、サイモンズのイタリア・ルネサンス

と古代ギリシャへのあこがれが、自分の同性愛によるばかりでなく、その二つの時代を研究することによって、自分が同性愛者であることを理解するのに役に立たと述べている。なお、プラトニッククラブを掲げていたサイモンズが肉体的関係を拒否しなかったルネサンス時代より、古代ギリシャの方に惹かれていたのも、当たり前だと、乱歩は主張している。<sup>19)</sup>

サイモンズの見方にも、乱歩の見方にも、古代ギリシャにおける同性愛観に大きな問題点がある。二人とも、同性愛をプラトニッククラブとして把握し、性行為を意味しないという古代ギリシャ同性愛の解釈は、サイモンズにも乱歩にも、ある意味では便利で、それを自分が掲げていた理想に曲げようとしているとも取れる。

性行為を無視しようとしている態度を、『ホイットマンの話』にもはっきり見られる。サイモンズとホイットマン (Walt Whitman、一八一九～一八九二) は文通しており、サイモンズが同性愛のことをどう思っているかという質問に対して、ホイットマンははっきりした答えを出さなかったと乱歩は書いた後、ホイットマンについてこう書いている。

これに反して同性の少年の友に対する情熱は異常に濃かでありまして、その同性というのも御者だとか若い兵卒だとかいうものばかりで、そこに野生賛美の詩人の風貌を見ることが出来るのもありますが、そういう男友に対しては、彼の所謂 manly love (無精神な意味の) を感ずることが多く、沢山の恋文に似た手紙を書いていたのです。<sup>20)</sup>

カッコ内の「無精神な意味」は乱歩の立場を明確にさせながらも、それを表明する必要を感じたからこそ、何か問題点があると、乱歩自身を感じたと言えなくもないと言える。同性愛の形式についての乱歩の考察の到着点、つまり、性行為を伴わない男同士の友情と同性愛は、『もく

づ塚』というエッセイの中で、よく現れている。ここで、同性愛という言葉は一切使用せず、その代わり「男性愛」という言葉を、乱歩が懐かしがっている日本特有の衆道の伝統と関連付けて使っている。

サイモンズの文学や評論テーマの起源を自己生活の「ひそかなる情熱」にあると説明しようとし謎を解決したつもり乱歩が、同じ考察の方法を自分の作品のモティベーションに応用しようとしている時、意外なためらいが感じられる。乱歩はサイモンズの詩を研究することによってサイモンズの同性愛観が理解できると述べているし、評論を書くことによって、同性愛を明確に表現できなかったはけ口を見つけたとも主張している。したがって、乱歩の場合はどうかという質問が必ず出てくるが、乱歩自身それに答えなかった。というより、答えようとしたテキストが探偵雑誌『ぶろふいる』の休刊をきっかけに中絶してしまった。それは、精神分析的な色合いが強い自伝の『彼』(一九三六～三七年)である。中絶の理由を次のように説明している。

この『彼』に託した自伝は、ここまでで、あとが書けなくなつて中絶した。それはこのあとに幼児性感のさまざまな実例を書く順序だったのだが、これがひどく露骨な話で、ほかしては書けない種類の事柄で、別の随筆『恋と神様』や『乱歩打明け話』などより、もっと恥ずかしいものだったからである。しかし、それを書かなければ、この告白文は意味をなさないので、結局、自分にはまだとても懺悔録は書けないと諦めてしまったのである。<sup>21)</sup>

乱歩は、サイモンズの「心の奥底」を応用するための方法を自分に応用しようとしたにもかかわらず、結局適用できなかった。衆道における男同士の関係を一つの理想と見ていた乱歩は、一九世紀から現れた同性愛の新しい概念を使いながらも、ホモソーシャルとホモセクシユアルとを完全に区別しているその新しい同性愛観には違和感を感じていたら

い。また、前に引用した「岩田君とは同性愛文献あさりの点で気が合っていたので、彼は私より年少であったけれども、二人の間に同性愛関係があったわけではない。よく旅を一緒に泊ったりしたが、私は彼と手が触っても嫌悪感を催すほどであった。」というような文章は、その違和感の一つの表れであり、『孤島の鬼』のいわゆる揺れもその一つの表れだと思える。

### 3 『孤島の鬼』の同性愛観の多レベル性

『孤島の鬼』はナレーターが掲げている「私達が経験した人外境」のことを語っており、ナレーターが自分のノートをもとにして書いたテキストである。ナレーターが妻と自分の意外な姿について聞かれた時すぐ読んでもらえるテキストだというふうで紹介されている。したがって、書き出しから、読者を考慮に入れてある作品だと、明らかに主張されている。その点は、これからの分析に重要な役割を果たしているから、ここではすでに強調したい。

複雑でどんでん返しが盛んなテキストでまとまりにくいから、簡単に全体的に粗筋を紹介する。

箕浦金之助は学校の時諸戸道雄に恋を求められたが、その「趣味」はないから拒絶した。しかし、八年後の大正末期、箕浦が恋に落ちた木崎初代に求婚したのは、同性愛者のはずのその諸戸である。箕浦は途方に暮れているが、間もなく初代は密室で殺されてしまう。また、箕浦が殺人の究明を頼んだ深山木探偵も鎌倉の海岸で暗殺されてしまう。箕浦は、いわゆる「変態心理者」で不思議なふるまいを見せている諸戸がその二人を殺したのではないかと思うようになる。しかし、諸戸と箕浦はついに話し合い、諸戸は、二つの暗殺の首謀者が自分の父、丈五郎であると

打ち明ける。丈五郎が初代の持つている系図帳を狙っているからである。同じ敵だとわかると、諸戸と箕浦は、力を合わせて、丈五郎が住んでいる孤島へ赴き、異なっている理由のためにはありながら、復讐しようとして決定する。様々のどんでん返しのおかげで、丈五郎が自分の障害（「せむし」である）を揶揄われてきたから、全世界を呪い、人類を自分が作った「奇形人間」によって置き換える巨大計画がまた、いくつかのどんでん返しがあり、「奇形人間」を自由にして整形手術で「普通の」形に戻したり、病院で手当てをしたりし、丈五郎は発狂し、箕浦は、丈五郎によって監禁されていた初代の妹と結婚するが、諸戸は、肉親の両親と再会してまもなく、病死してしまう。『孤島の鬼』の最後の文章は次の通りである。それは諸戸の父が箕浦に宛てた手紙の内容である。

道雄は最後の息を引取る間際まで、父の名も母の名も呼ばず、ただあなた様の御手紙を抱きしめ、あなた様のお名前のみ呼び続け申候。<sup>23</sup>

同性愛者の死亡が、物語論から見ると、作品の終わり、特にミステリの場合の終わりに、作品世界の秩序化、その世界の運営の妨害の消失にあたっているが、『孤島の鬼』なら、主人公の箕浦が結婚できるには、他の主人公の死亡が物語論的に必要であった。また、作品中何回も変態者と言われてきた諸戸の消失が、作品世界の完全な秩序化のために、不可欠な要素ともなっていた。ヘテロセクシュアリティの圧勝とも読めるわけであるが、どうか。マイケル・ブロンスキ (Michael Bronski) が *Pulp Friction: Uncovering the Golden Age of Gay Male Pulps* (二〇〇三年) で書いているように、アメリカのパルプ・マガジンが見せているゲイのイメージが多様であり、悲しい終わりが必ずホモフォビアの表現ではないと述べている。<sup>24</sup> 『孤島の鬼』の終わりについても同じように言えると思う。なぜなら、諸戸が死亡しても、愛の最後の表現は、初代と箕浦のそ

れではなく、諸戸と箕浦のそれであったからである。また、その愛は、性的行為につながらないとはいっても、諸戸から見て貞操を守り続けてきた愛だったとも言える。

諸戸と箕浦の言説はどのようなものか、具体的に見てみよう。

箕浦がナレーターであるからこそ、発言が多い。箕浦から始めよう。<sup>24</sup>

① 諸戸道雄というのは矢張りこの物語に重要な役目を演ずる一人物であって、彼は医科大学を卒業して、その研究室である奇妙な実験に従事している男であったが、その諸戸道雄が、彼は医学生であり、私は実業学校であった頃から、この私に対して、可成真剣な同性の恋愛を感じているらしいのである。

彼は私の知る限りに於いて、肉体的に精神的にも、最も高貴な感じの美青年であり、私の方では決して彼に妙な愛着を感じている訳ではないけれど、彼の気難しい選択に適ったかと思うと、少なくとも私は私の外形について聊かの自信を持ち得る様に感じることもあったのである。<sup>25</sup>

矛盾している描写（「奇妙」、「気難しい」）対「医科大学」卒業者、「高貴な感じの美青年」から構成されている諸戸の像は、フィリップ・アモン（Philippe Hamon）が命名した「規範岐路」（*carrefour normatif*）<sup>26</sup>の表出となっていると思う。アモンによると、「規範岐路」とは、読者にポジティブな点もネガティブな点も同時に内在している登場人物ということである。まさに、諸戸道雄はそのような人物だと言える。

② これまでの所では、読者諸君にも多分そうである様に、当時私にとっても、諸戸道雄は全く謎の人物であった。彼には何かしら、世の常の人間と違った所があった。彼の従事していた研究の異様なこと（略）性欲倒錯者であったこと等が、彼をそんな風に見せたのかも知れないが、併し、どうもそれ丈けではなかった。表面善人らしく

見えて、その裏面に、えたいの知れぬ悪さがひそんでいる。<sup>27</sup>

③ 散歩の時に手を引合ったり、肩を組み合う様なこともあった。それも私は意識してやっていた。時とすると、彼の指先が烈しい情熱を以って私の指をしめつけたりするのだけれど、私は無心を装って、併しやや胸をときめかしながら、彼のなすがままに委せた。と云って、決して私は彼の手を握り返すことはしなかった。<sup>28</sup>

④ 諸戸は私の傍に突立って、私の顔を見下ろしていたが、ぶつきら棒に、

「君は美しい」

と云った。その刹那、非常に妙なことを云う様だけれど、私は女性に化して、そこに立っている、酔いの為に上気はしていたけれど、それ故に一層魅力を加えた、この美貌の青年であるという、異様な観念が、私の頭をかすめて通過したのである。<sup>29</sup>

諸戸の言説に目を向けると、忘れていけないのは、諸戸の言説の存在がナレーターの箕浦に「許されている」ということである。したがって、諸戸の言説の形式は直接話法だけであり、それによって箕浦はそれらの言説の責任を取るのを避けることができる。にもかかわらず、責任を取らないという建前でも、ナレーターがそれらをテキストのなかに、直接話法でありながらも、挿入し残しているというの、意味深い。フランス語の表現を日本語に翻訳すれば、箕浦は諸戸に発表の場を提供しているわけである（*Minoura donne la parole à Moroto*）。

⑤ 僕は君とあの人のことが、ねたましくて堪えられなかったのです、それまでは、仮令君は僕の心持を本当に理解して呉れぬにもせよ、少くとも君の心は他人のものではなかった。（略）でも、僕はあの君の様子を見て、この世の凡ての望みを失ってしまったような気がした。本当に悲しかった。君の恋も悲しかったが、それよりも一層、

僕のこの人並でない心持が恨めしくて仕様がまかった。<sup>⑥</sup>

ここで見られるのは、諸戸が箕浦に対して自分の心を開ける言葉であるが、その場合、同性愛という立場を取らない。言い換えればいうと、ヘテロセクシュアリティとホモセクシュアリティの違いをしないわけである。「僕のこの人並でない心持」が同性愛と関連付けられないわけではないが、曖昧な描写であるから、諸戸の心持が非常に強いというふうにも受け取られる。つまり、諸戸と箕浦が親密な場合は、諸戸の言説には、セクシュアリティとジェンダーのテーマが入らないと言えらると思う。

しかし、こういう言葉もある。

⑥ 僕が親を親と感じない訳はまだある。それは僕の母親と称する女に関してだが、その偏僕の醜悪極まる女が、僕を子としてでなく、一個の男性として愛したことだ。それを云うのは、非常に恥しい丈けでなく、ムカムカと吐き気を催す程いやなのだが、僕は十歳を越した時分から、絶間なく母親の為に責めさいなまれた。お化けの様な大きな顔が、僕の上に襲いかかって、所嫌わず嘗め廻した。(略) その堪え難い苦痛が三年も続いた。(略) 僕は女というものの汚さを見尽くした。そして、母親と同じ時に、あらゆる女性を汚く感じ贈悪する様になった。君も知っている僕の倒錯的な愛情はこんな所から来ているのではないかと思うのだよ。<sup>⑦</sup>

以上の諸戸の自分の性格についての説明は、箕浦に対する気持ちとは関係なく行われており、その場合、フロイトを中心にしている精神分析的な観点から自分の「性的倒錯」を説明している。

イントロダクションで言及したように、諸戸と箕浦の、同性愛的な恋愛関係についての言説はかなり揺れている。箕浦の興味から拒絶まで、諸戸の心の打ち明け話から自分の同性愛者であることに対してのネガティブな見方まで。

この揺れのカギはどこにあるのだろうか。次の諸戸の文章が糸口になるだろう。孤島の洞窟に閉じ込められてしまい、逃げるチャンスがないと諦めてしまった二人が、死を待つしかないと分かった時、諸戸はこう述べている。

⑦ 嫉妬している。そうだよ。アア、僕はどんなに長い間嫉妬し続けて来ただろう。初代さんとの結婚を争ったのも、一つはその為だった。あの人が死んでからも、君の限らない悲嘆を見て僕はどれ程せつない思いをしていただろう。だが、もう君は、初代さんも秀ちゃんも、その外のどんな女性とも、再び逢うことは出来ないのだ。この世界では、君と僕とが全人類なのだ。

アア、僕はそれが嬉しい。君と二人でこの別世界へ籠めて下すつた神様が有難い。(略) 悪魔の子としてこの上生恥を曝そうより、君と抱き合って死んで行く方が、どれ程嬉しいか。箕浦君、地上の世界の習慣を忘れ、地上の羞恥を棄てて、今こそ、僕の願いを容れて、僕の愛を受けて。<sup>⑧</sup>

閉じ込められた世界では、地上のルール、例えば男同士の関係を規則付けるルールがなくなつて社会の抑圧が消えたから、諸戸は今度、自分の恋を明らかにできるし、それを箕浦に認めてもらえる。ナレーターは箕浦はそれを受け入れず、逆に諸戸を動物化し(蛇、犬、蛭)<sup>⑨</sup> 非人間化してしまう。洞窟にほかの人が助けに入ってくる時だけ、つまり、地上社会が入った時だけ、諸戸は再び人間と蘇っていく。

読書論から見てその社会が誰・何に象徴されているのであろうか。以上の数多い引用ですでに分かっただろうが、登場人物と読者の関係の構造に象徴されていると思う。つまり、登場人物と読者の関係を整理することによって、同性愛に関する意見、立場、見方も整理できるのではないかと考えられる。

## 4 読書論から見たジェンダー論、そして結論

一九六〇年代からロラン・バルト (Roland Barthes、一九一五～一九八〇) などの影響によって、作者のかわりに読者が視線を浴びるようになった。『物語の構造分析』(一九六六年) 中にある有名な「作者の死」をもって、作品が含んでいるテキストと読者の関係の可能性、また作品の分析の段階で読者の圧倒的な力を全面的に後押しするようになり、テキストを一つの閉ざされた世界とされるようになった。なお、その世界の運用を現代化できるのは、もはや作者ではなく、読者であるという捉え方になる。この見方は、極端な面もないが、読者と作者との間のバランスを取り戻すには必要な経過だったと思う。

乱歩は勿論このような読書論を意識的に展開したわけではないが、以下見るように、『孤島の鬼』の中の読者の存在の有無が重要な役割を果たしているから、読者と読書の影響を具体的に暗示している。①から⑦までの前述の引用を読者の地位の観点から考えながらも一度読んでいくと、引用を二つのグループに分けることができる。

まず、①②⑥の引用の方の中には必ず、読者(①②)あるいは読者が象徴している社会(⑥)が何かの形で存在している。乱歩が頻繁に使っている「読者諸君」といった読者への呼びかけが典型的な例だと言えよう。つまり、これらの言説は、第三者に向けられているのである。

逆に、③⑤⑦の引用では、登場人物のやりとりが読者と社会とは関係なく運ばれているのである。つまり、登場人物(箕浦と諸戸)の間の対話になっている。なお、その場合、二人とも、自分の関係を、ジェンダー的にも性的にも定義しようとはしない。箕浦の「口」を通してしか自分の立場が明確できない諸戸は、社会の存在を考慮に入れていない場合、一九世紀と二〇世紀の医学的な概説をもとにして自分の「変態性」を説明し

ている。それに対して、社会の存在がなくなった場合は、自分の心持をもっと正確に、かつ個人的に説明している。諸戸の医学的・精神分析的な言説は作品のナレーターとしての箕浦に、諸戸の恋愛関係の言説は作品内の登場人物の箕浦に対して行われているという、二重構造となっている。ナレーターの箕浦は、大正時代・昭和初期の同性愛に関する社会の意見、社会の偏見などを内在しているので、諸戸は、そのようなネガティブな要素を自分の言説に入れなければならない。

④は、中間的な引用だと言えるであろう。「君は美しい」までは、作品内の世界で、以後の「その刹那、非常に妙なことを云う様だけれど、私は女性に化して、云々」からは社会の言説が再び現れてくるのである。

諸戸の死、箕浦の結婚と諸戸の恋の拒絶は、完全に同性愛の拒絶になるのかというと、それまでは言えないと思う。なぜなら、この前見たように、乱歩の同性愛観は、古代ギリシャのそれに近いからであり、日本なら、衆道の習慣に近い。その観点から『孤島の鬼』の最後の展開を検討すると、また違うイメージが出てくると思える。

諸戸と箕浦の関係を、古代ギリシャのエラステース(愛する男)とエローメノス(愛される少年)、あるいは、衆道の念者と若衆の観点から見ると、箕浦は、若衆、諸戸は念者という関係構造が成り立っている。

『孤島の鬼』の冒険のはじめの方は、箕浦は怖がりやで、諸戸は年寄りで強いというイメージが成立するが、冒険が進むに従い、箕浦は以下のよう感じるようになる。

この日頃の奇怪なる経験はいつの間にか、私を冒険好きにしてみせた。戦争と聞いて肉が踊った。東京にいた頃の私には、思いも及ばなかった気持である。<sup>34</sup>

青年から大人になった箕浦は、諸戸の援助なしここまで辿り着けな

かったのだろう。また、衆道の兄弟契約によく似たシーンが、諸戸と箕浦との間に見られる。

諸戸はそう云って、目をパチパチさせたかと思うと、ぎこちない仕草で私の手を握り、昔の「義を結ぶ」といった感じで、手先に力を入れながら、子供の様に目の縁を赤らめたのである<sup>⑤</sup>。

「昔の義を結ぶ」とはどういうものか、明らかにされていないが、衆道の兄弟契約と見られると思える。箕浦と諸戸の関係を衆道の立場から検討すると、諸戸の死は、ある意味で物語論的に不可欠な出来事ともなってしまう。大人になった若衆と関係を続けるわけにはいかないという衆道の規則にのつとれば、念者の諸戸は、テキストから消えなければならなくなるのである。読書論とジェンダー論を交差して論じるなら、諸戸の死は、諸戸の成功の不可避的な結果だというふうに逆説的に受け止められる。

諸戸の成功であるように、この『孤島の鬼』は失敗作ではなく、現在の多くの読者が認めているように、乱歩の代表作、傑作である。敢えて言えば、乱歩の同性愛観が『孤島の鬼』に導入されたからこそ、成功したのであろう。なお、「面白さ」をモットーにしている大衆文学の面での成功ばかりでなく、大正時代・昭和初期の同性愛観が隙間見える面でも画期的な、見逃すべきではない作品であらう。

## 注

- ① この論文は、二〇一六年七月一五日、中川先生にご招待いただき、立命館大学においてクイア・リーディング研究会の第二回ワークショップの際発表させていただいたものをもとに書き直した論文です。この際、発表の貴重な場をいただいたことを、再び中川先生に感謝の意を表したいと思えます。なお、長年ご指導をいただき、日本文学などに関して挑戦的なご意

見を聞かせいただき、お礼を心から申し上げます。これからも、ご指導を賜り続けられれば何よりも光栄に存じております。

- ② 江戸川乱歩『探偵小説四十年』、全28・546。江戸川乱歩の作品からの引用は『江戸川乱歩全集』全30巻（光文社 二〇〇三年—二〇〇六年）による。全〇〇（巻）・〇〇（頁）と略した。以下も同じ。
- ③ 江戸川乱歩『探偵小説十年』、全4・333。
- ④ 同書、333頁。
- ⑤ 江戸川乱歩『孤島の鬼』、全4・14。
- ⑥ 同書、19頁。
- ⑦ 江戸川乱歩『わが夢と真実』、全30・160。
- ⑧ イヴ・K・セジウィック（上原早苗・亀沢美由紀訳）『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』、名古屋大学出版会、二〇〇一年。
- ⑨ 江戸川乱歩『モノグラム』、全3・149〜150。
- ⑩ 江戸川乱歩『一寸法師』、全2・500〜501。
- ⑪ 江戸川乱歩『獵奇の果』、全4・418〜420。
- ⑫ 渡辺憲二「江戸川乱歩と男色物の世界」藤井淑禎編『国文学解釈と鑑賞』別冊 江戸川乱歩と大衆の二十世紀、二〇〇四年、149頁。
- ⑬ 江戸川乱歩『書齋の旅』、全24・469。
- ⑭ 乱歩は「シモンズ」と書いている。
- ⑮ 江戸川乱歩『探偵小説四十年』、全28・538。
- ⑯ 江戸川乱歩『D坂の殺人事件』、全1・211。
- ⑰ Sándor Ferenczi（一八七三—一九三三）。
- ⑱ 江戸川乱歩『J・A・シモンズのひそかな情熱』、全24・522〜523。
- ⑲ 同書、548〜549頁。
- ⑳ 江戸川乱歩『ホイットマンの話』、全24・686。
- ㉑ 江戸川乱歩『彼』、全24・757。
- ㉒ 江戸川乱歩『孤島の鬼』、全4・330。
- ㉓ Michael Bronski, *Pulp Friction: Uncovering the Golden Age of Gay Male Pulp*, New York, St. Martin's Press, 2002, p.7.
- ㉔ 以下、太字引用者。

- ②⑤ 江戸川乱歩、同掲書、19頁。  
 ②⑥ Philippe Hamon, *Texte et Idéologie*, Paris, Presses Universitaires de France, 1984, p.220.  
 ②⑦ 江戸川乱歩、同掲書、106～107頁。  
 ②⑧ 同書、30～31頁。  
 ②⑨ 同書、32～33頁。  
 ③⑩ 同書、99頁。

- ③① 同書、193頁。  
 ③② 同書、305～306頁。  
 ③③ 同書、307～308頁。  
 ③④ 同書、253頁。  
 ③⑤ 同書、202～203頁。